

**なぜ
自由を制限
するのか？**

ツイートのコピー

よし、グリーン教国では、40歳になったら10年に一度、目一杯おしゃれして遺影を撮ることにしようw 保護区に入れる最後の年齢と同じだ。それは、保護区と自由区に分かれてから自由区に出てすることだから、本文には出てこないか。でもおもしろそー。

時間軸が違って、あんな時も、こんな時も、そんな時もありました！がどんどん増えていく。そしたら、何もなかった時の気持ちは忘れて、今の気持ちでなぜ分からない！と理屈を説明したくなる。それが、老いに気づかない人の特徴で、自分が陥っていた状態。

経験を積み老成していくことの意味を知らないと、分かるはずがないことを分からせようとして、怒りがたまる。

わたしの場合は疑問系で、これこれなるのに、なぜそうするのか？と質問する形をとるからさらにややこしい。

あなたは好きを自分で選んだのに、介護される人もいなければ介護の仕事がなくなるから必要と言う。自発的に「介護される人として必要とされたい！」と思っているわけではないのに、そんな必要のされ方で満足するはずない。そこにすごく腹が立つ。勝ち組意識が見え隠れして鼻につく。

そのくせ、自分の悩みは大きく見えるものです。誰でもそうですがね(^-^;)とか、言ってくる。一般論で逃げるならアドバイスなんかしようと思わずに、黙って聞いておけよ。あの人もあんな悩みがあるんだと分かったからと言って自分が直面する問題が解決する訳じゃないのに。

わたしも気をつけよう。

差別されるような状態だからって、他人を差別する気持ちがないわけじゃない。ただ、嫌でも嫌とは言えないだけだ。そうすると嘘をついていい顔している訳だから、自分で自分をいやな奴だと思う。はっきり言わないのは自分がかっこいいからで、相手を心配してではない。わたし冷たいなって思う。

朝から出かけることはできなかったが、よく休んだあとなら美術館に行けた。あんなに有名な人でも、自分が体験したこととか、好きなこととか、関心を持っていることがお話のベースなんだと知って、目が覚めた。

わたしは何をして、何に詳しいだろう？

気晴らし！？

グリーン教国は、王政。宗教の指導者を兼ねている。だから、王都に住み、ものがあふれる町がそばにあるにもかかわらず清貧を求められる。ケの部分が強調される。

町はハレの場で、欲望を満たすために人があつまり、娯楽を提供して客を奪い合っている。

清貧だけでは行きが詰まるが、満足することを知らずエスカレートしていくならやっぱり行き詰まる。

じゃあ、どうバランスをとるのか？

そこを言葉で説明できるようになるには？

たとえばさー、体丈夫で、お金もあって、時間もあって、やろうと思えばなんでも簡単にできたら、やってもふーんって感じだと思う。やったーってならない。

悪化してる！と焦る前のわたしは、またいつもの遊びかってちょっとうんざりしていたからよくわかる。

新しい体験とか、珍しい体験とか、未知を求める。

それはできなくて、同じこと繰り返すだけなのに、無理してどうするのかなって思っていた。

でも、それさえできなくなるかもしれないと分かって、また楽しくなった。

好きなことは繰り返しても楽しいと思える。

たとえば、一杯のインスタントコーヒーだって、楽しく飲める時もあれば、喫茶店で飲みたいと不満に思うこともある。

これはこれでよし！といつも上機嫌でいるのって、自然に湧き上がる感情を変えることはできないから難しい。不機嫌な自分と向き合えず、上機嫌でいなければならないとなったら辛い。

いつものやつ！が好きな人もいれば、新作です！が好きな人もいる。たいていは、いつもを楽しみつつ、たまに新作を楽しむ。

またこれ！と不満を持ち、楽しめない。あたらしいものを拒絶し、他人にも強要する。そういう状態は、つらい思いをする人が出てくる。

ボタンはあれもこれも試してみたい好奇心旺盛な女の子だが、教えを守るよい子でもいたい。自分のことだけなら我慢で解決することもできる。しかし、自分が我慢したのだから、みんなも我慢すべき、では国は衰退していく。宗教の指導者と国家の指導者のバランスをどうとるか。

弱い人を保護する福祉では、生かされた人が苦しい。自発性を認め、楽しみを持つことを認めるなら、費用もだが、満足の仕組みも大切ではないか？

できない！があって、それができた！があるから満足するなら、言われるままに許してもあきるだけだ。

病気だろうが、健康だろうが、誰でも起きる問題。

解放された瞬間は楽しいが、それが普通になったらつまらない。

だから、期間限定、今だけ、今回限り、など特別感をつけて誘ってくる。

受け取る側は、特別さにわくわくする。

しかし、特別さを生み出すことは難しいことだ。

難しさが分からないとムチャな要求をする。

提供する側でもあると、できることと、できないことの区別がついて、ムチャを言わない。だが、できそうなことは聞いてみる。

赤毛のアンのころのように、自給自足の生活をしていて、コンサートの出し物も身近な人で、「自分がやる可能性がある」ころは、受け取る一方ではなかった。

「金銭で生活する＝買うが、売るものはない＝消費するだけ」は成り立たなかった。

大金持ちには運営する仕事があったし、金がなければ消費できない。

自給自足なら、「日常生活に必要なことができる」で十分認められた。

しかし、商売では、特別さを獲得しなければ生き残れない。ハードルがグンと上がる。頑張っても、頑張っても、終わりはこない。無限の努力が最低条件になる。

努力を続けて特別であり続けることは素敵なことだ。

しかし、それを基準にしたら、ほとんどの人は脱落者になってしまう。

「普通で暮らせる」がなければ、特別に人が集まることもなく、結果的に自滅するのではないか？

共産主義に資本主義は勝ったが、資本主義も万能ではない。そこが書きたい。

たくさん稼いでたくさん使う人がいてもいい。それはその人の活力だから、自分のお金で遊ぶのは自由だと思う。

しかし、儉約しながらたまに気晴らしをする堅実な暮らしが成り立たない経済システムでは、行き詰まると思う。

だから、二つに分けようと思った。でもうまく説明できない。

そうか、お菓子を一個買うかどうかとか、ものすごい小さいやりくりの話から、中間がなくて、一気に資本主義になってしまうから、話のつながりが不明瞭なのか？

ポップ・ステップ・ジャンプにならずに、瞬間移動している。

わたしが好きだと思ったものを繰り返し食べたいとリピートする。それを多くの人もすれば、それは定番メニューとなり、伝統の味となり、受け継がれて老舗の味になる。

わたしが新しいものが食べたいと、いつもと違うものを買う。しかし、一回きりで繰り返さず、また別のものを買う。多くの人が同じ選択をすれば、単発メニューとなり、次々現れては消えていく。

選ぶ人が多くないとそのメニューを用意し続ける意味がないから、いくら自分が気に入ってもなくなる。まだ人気があるうちにやめることもある。なぜなら、売れなくなって材料が余れば損をするから。

人気がある！人が集まる！リピートする！などが起きれば商売として継続できるが、興味を持たれなければ損をする。

好きなものを自由に選べる環境は、選ぶ側はとても楽しいが、提供する側はとても難しい。

用意して全然売れなかったら、損をする。

中間案として、予約制がある。

自給自足なら、古いものから痛まないうちに順番に食べていくことになる。季節のものを食べるから、同じ材料が続くことになる。あきないように、味付けや調理法を変えることもあるだろう。しかし、スーパーで食べたいものを買うような生活とは、自由度がまるで違う。

一人分を100とした場合、100生産すればよい。

しかし、500くらい生産されていて、必要とされる100を独占しようと100仕入れる店が5つ並んで競争していたら？

50売ればもとがとれる設定価格で売ったなら？

70売れば利益が出る価格なら？

70の方が安いから人が集まる。

お金さえあれば、好きなものを好きなときに選べる暮らしは楽しい。だが、それは無理と無駄の上になり立つ危ういものだ。

利益が出るほど売れなかった店がつぶれて統廃合されることで成り立っている。

100でいいのに500作って400分余計に働き、売り損なった店がつぶれ、働いたのにお金が入らない人を作る。

お金が入らなければ、自分が必要なものを買うこともできない。

何を食べ、何をを使うか選べず、決められたものを買うしかない暮らしは窮屈だ。

しかし、生産する側、売る側としたら、確実に需要が見込めて、働けば金になる暮らしは安心だ。

。

だが、計画生産・配給というシステムを全体に押しつけると、生産力が落ちるし、その製品では困る人の需要に応えることができない。

もし、画一的な製品やメニューで困らない多数の使ってくれる人を確保して、自分たちで使うものを作るシステムを持ち、なおかつ、お小遣いで好きなものを選べる環境が作れたなら？

リピーターを確保しつつ、新しいことにチャレンジして、安定した経済システムになるかもしれない。

自由競争の結果、確かに安い値段で好きなものを選べるかもしれない。

しかし、選ばれるための苦労は、選んでいる自由に見合うものなのか？

結局、お金がなくて、スーパーの特売品を買うしかないなら、自由など実質ないのではないか？

笑わせたもの、楽しませたもの、感心させたものが勝つ。それは努力の結果だから当然かもしれない。

しかし、十分期待に応えられるものまで無駄になるやり方が、ずっと続くとは思えない。

では、どうすればいいのか？

何を標準とし、どんなことをすればいいのか明確にする必要があるのだと思う。しかし、拡大されてきた自由を制限する訳だから、痛みを伴う。

それでも、なにをしたら食べていけるか分からない困難さを体感していれば、共感を得られるかもしれない。

わたしは支払いのためにコンビニに行った時、100から200円のスイーツを買うことを楽しみにし

ている。月に2回くらい。毎日行ったらお金が足りないし、確実に太ると思う。

買うから、自由にお買える店がなくなるのは寂しいと思う。だが、予約制になって、数日待ってもいいかなと思う。

だから、保護区で、ネットで頼む仕組みになってもいいかなと思った。

それは嫌！なら、自由区で生きることもしゃできるなら、住み分けできるかなって。

うーむ、まだ結構ワープしてるなあ。関係を説明するって難しい。今日はおしまい！

好き選ぶための無駄と無理から、だから固定部分をつくろう、のつながりが唐突や。なんで普通の暮らしを作るのかが説明できてない。

理由は二つある。

一つは、生産力が高く、全員が働かなくても成り立つため、誰が働いて、誰が働かないか、線引きがある。

もう一つは、決めることで、対処する方がやりくりできること。

あと保護区を給食制にした場合、自給自足を基本として加工食品を使わない場合と、おかずは基本レトルトにする場合では、問われることが違ってくる。

野菜を作るところから自分たちで働けば自立性は高まるが、誰でも参加できる状態ではなくなる。

育てることもしているが、それは夜食など三食以外で使われるものとした方がよいかもしれない。

基幹産業として、米や野菜を育てて出荷する。自分が作ってないものは、他の保護区からもらう。

食料をつくり、材木を育てて、子どもや老人を見守る。家庭的な役割を果たす人を支援するための費用を、商売で成功している人たちから、運営権として出してもらう。

ベーシックインカムは、都会ぐらしをするための費用を個人に配る。

保護区は、役割を持ち、集団で支え合って暮らす人々に運営費を配る。

たとえばさー、月に一人8万くらい配られたとする。そのお金を使って買い物し、家計を運営したとする。

元気ならばオムツ代やら、荷物が重くては持ち帰れないという問題は起こらない。しかし、衰えてくると余計な費用がいるし、手助けしてくれる人がないと難しくなる。

余剰生産を作らないために、金銭労働をしない人は、役割を果たし、人の世話をする。

保護区の人々の行動パターンや要望が決まると、それに応えるための自由区の産業も決まってくる。

保護区とは別に、自由区では、自由区で暮らす人や海外で暮らす人も視野に入れて、仕事を創造していける。

保護区のご飯は、朝はご飯と味噌汁、昼はご飯と味噌汁とおかず一品、夜は加工食品にしたら、加工食品を作る工場と配送システムがいる。

工場は管理区の13から15歳の子どもを中心とした労働者が働く。日用雑貨も管理区の工場で作られる。

ダメだ。混乱してきた。今日はここまで！

ツイートの後で関係を考えてみた

「好きを選ぶ」という問題から、なぜ「標準を作る」という結論になるのか？
「無意識に何を肯定しているのか？」を知るために書いたメモ。

生産力が低く、足りない状態である場合、働けば必ず売れて豊かになっていく。
しかし、生産力が高く、余る場合、売れないという問題が起きる。

たとえば、食糧生産を100人の村で90人でやっていたのが、機械化されて20人でできるようになったら？

食べる以外の部分で、必要なことを提供することになる。

一次産業から二次、三次と移り変わるなかで、どうしても必要なことから、あったらいいがなくても困らないことが増えていく。

グローバル化したことで、食糧さえ作らなくても買えばすんでしまう。
それは、少ない人数で大量に生産できるようになったから起きたことだ。

どうしてもなくては困るものと、あってもなくてもよいものの違いはなんだろう？

「生きていくために不可欠なもの＝必要」と考えた場合、生命維持に必要なことと、精神を安定させるために必要なものがある。

日常（ケ）の部分は、生命維持に必要なことが中心になる。

非日常（ハレ）の部分は、精神を安定させるために必要なことが中心になる。

自炊して、節約しながら必要な栄養をとる。これに関わる産業は、農業や商業。米や野菜を作る人や、それを個人まで届ける仕組み。

持っているお金と提供される商品のつり合いで、合理的に決まる。

贅沢して、珍しいものや美味しいものが食べたい。こちらは、気分を晴らすという効果がある。その方法はいろいろで、「気分を晴らすこと」は必要だが、どんな方法を選ぶかは選択の幅が広い。

ゆっくり昼寝するだけで気分が晴れる人もいれば、超高級なセレブ生活をしていてもまだ足りない不満を持つ場合もある。

何をしたら、気分が晴れるかは、曖昧なもので、はっきりした因果関係が分からない。「気分が晴れた」という結果で判断するしかない。

一般的には、毎日節約して手間をかけずに食事をしているが、たまには外食しようか！となったとしよう。あるいは、高い食材を買って、凝った料理を作ろう！となるかもしれない。

何をするにしても、一回に食べるのは一食だから、作った人は買わないし、買った人は作らない。

「自炊してもいいし、買ってでもいい」という状態を作るとは、どちらかが無駄になる。

「売り切りごめん！」ならば損も少ないが、外食した分、スーパーの食材が売れなくなる。それは、自由選択を認めているから起きる問題。

基本は自炊だろう。それが一番安くつくからだ。特に家族が多い場合や、仕事や学校がある場合、朝から外に食べに行く余裕はないだろう。

自炊する人でも、自分の好みに合わせて、好きなものを選ぶことができる。だから、何が、どれだけ必要かは、分からない。

もし、ごはんのみそ汁と決まっていたなら？

「人口分の米と大豆を用意する」などと基本的な計画を立てることができる。その計画は、確実な需要で、「必要」といえる。

「この材木を使って、こんな家を建てます」「この家電を使います」「この石鹸を使います」など、決まっていたら、それは「やらなければならないこと」で、「やってもやらなくてもいいこと」ではなくなる。

「全員それを使え！」とか、「それしか使うな！」という状況になれば、その産業は成長が止まってしまう。

また、それでは「嫌な人」「困る人」が、行き場を失ってしまう。

でも、多くの方は、すすめられたものや、安いものを買って、「これでなければならない！」というつよいこだわりを持っているわけではない。

洗濯機なら「毛布が洗える」など、「この条件をみたしているならどれでもいい」という買い方をする人が多いのではないだろうか？

条件を満たすよい商品であるなら、「これを使ってください」と配られたとして、「まあいいか」と思うのではないか。

しかも、使用者が生産者に「要望」を出す権利も持っている。

こだわりのない部分を画一的な大量生産で安く交換可能に作ったら、必要なことを最小限の労働力でまかなえる。

農業とか、林業とか、広い土地が必要で、その土地の自然をよく知り、経験がものをいう職業は、村人がする。

16歳以上の大人の仕事となる。

工業製品は、設計は技術の継承が必要だが、作業はマニュアル化すれば多くの人ができる。だから、13～15歳の子どもが交代で行う。

保護区でその土地の自然や人間を知り村の運営に関わるとか、管理区で技術を身につけ企画する側になるとか、自由区で好きを満たして購買意欲を刺激するとか、なんらかの特性がなければ、生き残ることはできない。

「何か」がなければ、単純労働で他人に使われることになる。たとえば、自由区の安いアパートに住んで、管理区のサポート労働者としてパート的な働き方をして、自由区での自由選択のある暮らしを楽しむなら、老後の蓄えまでは回らないだろう。

そこで、40歳までに保護区に入ることを選ぶなら、村の運営を支える一員として、個別住宅に住み、会計を共にする暮らしをすることになる。

保護区を拒み、40歳を過ぎても自由区に残ったなら、働けなくなった時の保証はない。公的福祉はないから、個人がボランティアで行う事業に頼ることになる。

自分の才能にかけて、自由区で生きる挑戦をする権利は誰にでもある。むしろ、挑戦することがすすめられる。

だが、そこで結果が出せないまま40歳を迎えたなら、保護区に入るという選択肢があるなら、踏み出す勇気になるのではないかな？

単純労働でいいのか、それではいやで何かを成したいのか、実践を通じて問うことになる。
あなたはどう生きたいんですか？

農業を商売にすることもできる。特別な食材として、高く売れることをアピールすることもできる。

しかし、そういうブランドアピールは、誰でもできることではないし、みんながしたなら、結局、振出しに戻る。どっちもよいものならば、どちらを買ってもよいのだから。

自分たちが食べるために作るのと、売るために作るのでは、問われることが違ってくる。

もし、わたしが食べるために作ったならどうするか？

見た目がきれいで規格が揃っている野菜より、できるだけ農薬を使わず美味しく作ることを目指す。

農薬ゼロは難しいが、ゼロに近づけようとはするだろう。

「多少の虫食いはとりのぞけばよし！」と考える。

自給自足をしていたころは、「生活」が中心にあった。

「生活のためにお金を得る」は、正しいようで、おかしな姿だ。

わたしは、食べるものや住む所や着るものが必要だ。だが、作物や材木を育てる土地を持っていない。だから、何か別のことをしてお金を得ることになる。

では、わたしができること、したいことで、お金をもうけることはできるのか？

たとえば、小説を書いて、それが売れたり、売れなかつたりする場合？

小説は、「心を豊かにする＝気晴らし」という意味では、必要かもしれない。

だが、書きたい人は多いが、書くことで食べている人は少ない。

まずデビューするまでが大変だ。デビューしても、書くことだけでは食べられなくて、別にアルバイトをする人も多いという。

わたしのようにネットで無料公開している趣味を含めたら、書いている人数はすごく多いだろう。

「小説が売れなくて金がない」は、個人の問題だ。

だが、「おごってもらえば食べることができる」は、「全体として、必要なことは満たされており、必要な労働をしてくれる人がいるから、食べ物がある」という社会の問題だ。

少人数で全体の需要に応えられる場合、「好きなことだけして必要なことはしない人」がいても、困らない。

わたしがなんとか暮らせているのは、親と福祉のおかげだ。

もし、生産力が低く、働けないものを養う余裕がないなら、見殺しにするしかなかったことだ

ろう。

それは、やさしいとか、つめたいとか、心の問題ではない。どんなに優しい心を持っている人でも、選択しなければ全滅するのだ。

生き延びる可能性が高いものを残し、弱いものを切り捨てる。そういう厳しい選択は、古い時代には日常に溢れていた。

しかし、見殺しにすることは辛いことだ。

だから、もっと豊かに！と努力し続けてきたのだ。

だが、その夢が叶った結果、何が待っていたのか？

「何かをして売らなければお金が入らない」がしかし、「必要なことは少人数で足りる」なら、「何もすることがない」という問題に行き当たる。

「弱くて働けない人を支えよう」は、福祉という形で多くの人が認めている。

「グデグデしていたい」は、ヒモ暮らしを受け入れる異性によって支えられている。

では、「働くべきだ！と自他ともに思い、働きたいのに、働くところがない」は？

ベーシックインカムで、必要なものを買うお金を配れば、「食べられない」という問題は解決するだろう。

しかし、その財源が「好きに選んでよい競争の結果、ヒットを生み出し大儲けした人からとった税金」ならば？

一人一回一食しか食べないから、「作る、買う、外食する」の中から一つが選ばれる。しかし、その総和は、人口に比例する。

ところが、「これかわいい！」と不要なものが飛ぶようにうれたなら、莫大なお金が集まる。もし、それが、実物ではなく簡単にコピーできるデジタルデータなら？

たとえば、ちょっと前に爆発的ヒットを生んだラインスタンプのようなものなら？

少額の投資で莫大な金を生み出す可能性があるなら？

ラインスタンプが生み出したお金は、何を意味しているのだろうか？

たしかに、お金が動いて、経済活動が活発になったかもしれないが、社会にとっての意味は？

あるいは、写真に撮って公開するためだけに買った食べ物や服などを使い捨てたなら？

食べているわけじゃないから、「見せたい！」と思わせれば次々購入されていく。

だがしかし、それで活性化した経済とはなんなのか？

物理的に必要なことは、需要に限界があり、少人数でできるため、シェアの奪い合いとなる。激しい価格競争が始まり、働いても働いても儲からないという問題が起こりやすい。負ければ投資している分マイナスだが、買ったままはプラスは微々たるものなら？

精神的なことは、一つで終わるとは限らない。あれも、これも、それもと使っていないのに、持っているだけのコレクションもありえる。

そういう流れに乗ると、莫大なお金が手に入る。

しかし、必要不可欠ではなく、「あったらいい」ものであり、「なくてもいい」「他のものでもいい」から、すごく不安定だ。

すべての問題の根底にあるのは、「全員が働かなくても困らない」という「生産力の高さ」にある。

そのうち、必要な労働を全部機械がやってくれて、人間は働かなくてもよくなるかもしれない。

その時、時間を何に使うのか？

その状態をキープするのに必要なことはなんなのか？

生産力が高い資本主義社会では、運と才能に恵まれれば、好きなことだけして生きていける。許されてる範囲が広いから、勝手に工夫して、勝手に楽しみ、楽しい一生を過ごすことができる。

じゃあ、才能がないとは言わないが、なかなか開花せず、運にも恵まれず、くすぶっているなら？

わたしは、「食べるために働かなければならない！」と「疑問の答えを追求したい！」という真逆のベクトルの間で揺れ続けていた。

疑問の答えを追求することで食べていくことは難しい。どうやってお金にすればいいかわからない。だから、まずは食べていくことが先だろうと考えた。しかし、夢をあきらめられないから、ゲームプログラマーになろうとか、簡単にはいかないことに挑戦した。

一年学校に通って、「習ったことは分かるが、習ってないことを自分で考えてプログラムする

方法を編み出すことはできなから、仕事にはできないだろう」と気づいてしまった。しかし、自分の貯金をはたいて親に支援してもらって入学したのに、今さら就職できないという事態になったらどうしたらいいんだろう？と悩んでいたら生理が止まってしまった。

不安で不安でしょうがない状況から抜け出したのは、できちゃった結婚をしたからだ。

離婚して、実家に戻っても、ほとんど寝たきりで起き上がることができず、生計を支えるほど働くことは無理だと自他ともに認める状態だったから、支援してもらって、できるときに好きなことをしている。

もちろん、元気な人のようにはいかないが、しかし、失敗しながら、少しずつ答えに近づこうとしている。

将来のことを考えたら不安はあるが、だが、好きなことを貫く勇気はなかったのに、結果的にチャンスを与えられた。

それはもうそうするしかないからしていることで、他に出ることはあるのにあえてリスクを背負ってやってることとは違う。

だから、好きなことしていいよ！って言われても、できない気持ちはよく分かる。

死ぬまで継続的に遊ぶ余裕があるくらいのお金が入ってくるとはっきり決まっているなら安心して好きなことができるかもしれないが、「好きだが食べていくことはできない」という状況が続けば迷い出す。

物理的な需要には限界がある。

しかし、精神的な需要には、限界がない。

1枚の絵画に原価をはるかに超える何百億という価格がついたとして、それが社会にとってどんな意味を持っているのだろうか？

アイデアというのは、簡単には手に入らない「価値のあるもの」で、「巨額の富を得る理由」になる。

だが、それは誰でもできることではないのだ。

目指しても、目指しても、結局手に入らないものなら、「初めから目指さない」という選択だってありうる。

それを非難できるだろうか？

何かを生み出すという強い欲求を持つ人にとって、それは苦しくとも楽しいことだろう。

だが、好きな人の隣にすることが幸せという価値感の人にとっては、そこに意味を感じられないだろう。

「別に食べるのに困らなければそれでいい」となる。

だが、単純労働は低賃金という問題にぶつかる。

隠れた需要を喚起して、爆発的なヒットを生む。

かかったコストに比べて、信じられないくらい儲かったとしよう。

そういう「異常なヒット」から得られた収入が、「税金」として集められ、再配分されているなら？

そういう異常なヒットは、「気晴らしにお金を使う」など、あってもなくてもいいが、「欲しい！」と財布のひもをゆるませることで起きる。

漫画を全巻そろえたい！という欲望も、家事を楽にしたい！という欲望も、別になくても困らないが、「欲しい」という気持ちが湧くから買う。

「必要不可欠」ではなく、「我慢しようと思えばできるが、欲望に従いお金を使うことを選ぶ人が多ければ大ヒットする」を前提とした経済システムは、不安定で異常なものだ。

「気晴らしをしなければならないシステム」というのは、異常ではないだろうか？

たとえば、テレビ。

冷蔵庫や洗濯機や掃除機は、家事の負担を軽減するのに不可欠だが、テレビはあってもなくても構わない。

情報が得たいなら、本でも、新聞でも、ネットでも、口コミでもよい。

ゲームとか、漫画とか、映画とか、音楽とか、どれかをしている間は、他のことはしない場合、奪い合いにある。

(わたしは、ゲームしながら音楽を聞くが)

そもそも、「ぼーっとする」という過ごし方を選んだら、何もいらぬ。

娯楽に関わるものは、いる人にとっては絶対だし、要らない人にとっては不要なものだ。

友だちとのおしゃべりが一番で、提供される娯楽に興味を持たない人もいるだろう。

娯楽とは、はまれば夢中になって楽しいが、やらなくてもいいことだ。

一番に節約されていく部分。

必要なことは少人数で足りるし、激しい価格競争で報酬も少ない。労働環境も厳しい。

不必要だが、当たれば大きく、不安定で運の要素も大きく、才能が必要なことは、誰でもできることではない。

しかし、あたれば大きく、夢があるから、誰もがなりたがる。やりたい人は途絶えることが

ない。だが、実際に成功するのは一握り。そして、一度の成功が、次の成功を意味しない。水商売であり、不安定なもの。

低賃金で必要なことをする人は、お金がないから、節約して不要なことを控える。すると、大勢に支持され、爆発的なヒットを生む可能性が低くなる。必然的に、再配分するための税収が望めなくなる。

「売って食べる」をする限り、この問題は解決しない。

「作って食べる」をするためには、「作ったものを必ず食べる人」が必要。

作ったものを食べるから、「好きなものを選択する」ではなく、「いつもの暮らし」をすることになる。

それでは嫌な人、困る人は、「解放地域」をもうけて、住み分ける。

だがしかし、決めるということは、「自由を制限する」ことであり、「何に決めるか？」を共有するからぶつかりあいがおきる。

たとえば、保護区と自由区のような「住み分け」をしなくても、「米と味噌を無料配布するので、朝ご飯はご飯とみそ汁にしてください」という「物理的なセーフティネット」を提供したとしよう。

大豆にアレルギーがある人は困る。

パンが好きな人は反発するだろう。

米を炊くのがめんどくさいという人も出てくるだろう。

お金の余裕があって、配られたものを使わなくてもよいなら、捨てて買うことをする。そして、廃棄が問題になる。

しかし、「好きに選ぶ」ということは、「無理や無駄を出す」ということだ。

そして、選ばれるための激しい競争にさらされて、勝ちと負けができる。

その問題は、お金を配ることで解決するだろうか？

いくらお金が配られても、結局、家事はしなければならない。

それも、家事ロボットが配られて、家事も育児も介護も看護も全部ロボットがやってくれるようになったなら、人間は何をするのだろうか？

「食べて寝る」をしているだけでよくなったら、なにもしないでいるだろうか？

知りたい、自分の力でやりたい、などと思う人が出てこないだろうか？

実際、昔のベーシックインカムの実験でも、お金を配っても働くことをやめる人はほとんどいなかったという。

新たに資格を取るために離職した人はいたが、基本、みんな働き続けたという。

だが、必要なことは少人数でまかなえ、人手があまっている。

非日常を生み出すことは誰でもできるわけではない。

もし、「インフラは集中して整備すべき。だから、都市に人を集め、田舎は無人でよい」と考えているなら、「国土を監視し、保全するために全国に人を配置する」というわたしの考えと真っ向から対立する。

だが、「地方に住み、原生林を見回り、開拓した田畑を継承しつつ、子どもや老人の暮らしを見守る」を「すべきこと」と考え、「商売で爆発的なヒットを生み出し、得たお金を再配分する先」と考えた場合、地方に人を配置することは必要なことだ。

食べるための農業、使うための林業をしても、金銭は得られない。

金銭労働をしている自由区の成功者からお金を集めて、「保護区の大人のおこずかいとして再配分する」ことで、「自由区の商品を買う顧客」となることが期待される。

都市と田舎なら、どちらが暮らしやすいかといったら、都市だ。いろいろなものが整備されていて、楽しいこともいっぱいある。

しかし、田舎を都会化することは意味がない。なぜなら、利用人数が違えば、問われることが違って来るからだ。

田舎には田舎の整備の仕方があると思う。それが、センターを中心とする中枢機能と個別住宅システムだ。

センターとセンター、センターと都市は道路網で結ばれている。

しかし、センターから奥に入った先は、林業道路はあるが、その奥の広大な原生林は、野生の生き物が住む危険な場所で、道らしい道もなく、徒歩で野宿をして見守るしかない。

そうなると、土地の状態に気を配り、「案内役」として自然の中で生きるレンジャーのような生活をする人が必要だ。

しかし、そういう人は、体力も頭脳も優秀でなければ難しい。

お金にはならないが、森を守る人の生活を支援することは、意味があることだと思う。

林業も農業も厳しい仕事だ。機械化が進んでも、肉体労働であることは変わらない。
多くの人ができるが、不健康な人には難しい。

じゃあ、給食係になることは？
機械を導入しても、結局、体力勝負だ。

医師も体力勝負だし、頭脳が必要だ。
保育士も、先生も、体力も、頭脳も必要だ。

わたしにはどれも無理だが、多くの方は、選択することができる。

日本は島国だから、「国境を接する」ということがない。
「国境線を越えて、不法移民が押し寄せる」という問題が起こりづらい。
しかし、海を越えて、無人になった田舎に住みつき、自分たちの生活を築いていたなら？

山の暮らしは厳しいから、現代なら、都市に潜伏することを選ぶだろう。
しかし、「いつのまにやら山奥に町が作られ侵略されていた」が起こらないとも限らない。

「ここは日本の領土である！」と宣言しただけで守られるものだろうか？
きちんと監視し、管理することが必要ではないか。
それは、「生産力が高まり、衣食住が少人数でできるようになったから、あまった労働力ですべきこと」として認められるのではないだろうか？

「実際に住みついて生活している」という状態を作っておくことは、国の維持として、大切なことではないだろうか。

昔と違って、移動が簡単になったからこそ、自国の領土はきちんと監視下におくべきだと考える。

まとめると以下のような感じかな。

「都会で、お金を稼いで、好きなものを買って暮らす」は、憧れだ。若いころは特にそういう気持ちが強いだろう。

だが、田舎に住みつき、水源地を守り、不法投棄や不法移民から国土を守ることが、国としてすべきことならば、「意図的に田舎に人を配置する」が必要だ。

田舎の何がいやかって、閉鎖的な雰囲気だろう。

あとは、監視される感じかな。

同じ顔ぶれで、ずっと暮らし続けていて、互いに好き同士ならいいが、険悪な雰囲気になったら困る。

ルールを設けて、適度に距離を開け、プライベートを確保する工夫がなければ、嫌だと思う。独裁を防ぐためには、「渡り」という入れかえ制度も必要だろう。

買い物できない不自由さもある。

それは、交通網を整備して、物流システムを充実させることで解消するだろう。

「今すぐ欲しい」は無理でも、予約で一週間以内に手に入るならば、そんなに困ることはないだろう。

わたし自身は、管理区のグループホームで暮らすことになるだろう。

一応高校は卒業しているし、20代のころはアルバイトもしていたから、卒寮資格は取れるだろう。

しかし、保護区の仕事はどれも体力を必要とするものだから、役割を果たすことが難しい。

「給食を食べて、自宅の風呂に入って、洗濯して寝る。たまに掃除する」はできるが、精神科の病院に通わなければならないし、「働けなくなった人を世話する」は受け入れられても、「初めから働けない人を受け入れる」は難しいのではないだろうか。

保護区まで何時間も車に乗ることも負担が大きい。そう考えたら、「支援が必要な人」として管理区のグループホームに入ることになるだろう。

わたしは最初、グループホームで暮らす人には、お小遣いを配ることを考えてなかった。

しかし、ただ与えられるものを受け入れるだけの暮らしは、生きる意欲を失う。

弱くて働けない人にも、必要なものを供給するだけでなく、好きなものを買ってよい自由があるだろう。

集団で行動することになるだろうが、自由区に気晴らしに行くとか、そういうことも必要かもしれない。

管理区は、自由区の隣だから、都会にある。インフラが充実している。

今でも、都会なら一人で旅することができる。

支援を受けている立場で、「お小遣いをためて自由な旅行」を認めるのか？

基本、保護区は住民のためのものなので、旅行先として選べない。

自由区である、国際都市と国内都市を旅行することになる。

わたしは動き過ぎると便が漏れる。今まではよく休めば、便漏れは起きなかった。ところが最近、よく休んでいるのに、液状の便が近い間隔で2回漏れた。パンツだったから服を汚してしまった。それが起きたのが家や、家の近くだったから着替えれば済んだ。だが、遠く旅先でなかったら？

オムツを捨てる場所はないそうなので、防臭袋を用意して、持ち歩くしかないそうだ。

ウォシュレットがなかった場合に備えておしりナップを用意して、替えのオムツも用意して、トイレ関係だけ肩掛け鞆に入れて持ち歩くことにした。

実際に外で便が大量に漏れたことはないので、それで対処できるのか分からない。

外出先の用心として初めてオムツを買いに行った時、ライフリー超うす型が、下着感覚とあったのでそれにした。

しかし、ライフリーの会社の相談窓口にお問い合わせたら、超うす型は尿漏れ前提で、便漏れにはうす型とパッドの併用をすすめられた。

買ってしまった超うす型は、日常の突然の便漏れ不安対策として、毎日履くようになった。

普通サイズの羽なしナプキン（ロリエ）を併用すれば、軽い尿漏れや、ちょっと便がついたくらいはナプキンの交換で対処できる。

おパンツの時は、コンビニまで15分の外出でも、便漏れが起きないか不安でしかたがなかった。

お金はかかるが、毎日ビクビクしながらくらしていたのが、オムツをはくことによってずいぶん心理的負担が軽減された。

しかし、連日ちょっと活動しただけで便漏れするようになり、オムツに便を漏らすことが頻繁になった。

いつか、何もせず眠り続けていても便が漏れるようになるかもしれない。

そうになったら、自分で処理することもできなくなっているだろうから、施設に入って世話されることになるかもしれない。

わたしは、その日が来るのがとても恐ろしい。費用をどうするのかという問題もある。

それは仮定の不安だが、確実に起きる問題として、寒い間はいいが、暑くなるとオムツは足の付け根がかぶれることがあげられる。

漏れる可能性が高いが、夏はおパンツに戻すかもしれない。冬の間の調子を見て決める。

便が漏れたら、手につく可能性が高いので、個室に洗面台もある多目的トイレが望ましい。

できれば、多目的トイレにオムツを捨ててよいゴミ箱があるとなおよい。

わたしは、多目的トイレは、車椅子の人のためにあるのだと思っていたが、自分がオムツをするようになって、オムツの人にも必要だと分かった。

だが、見た目は44歳のおばさんだから、なんで多目的トイレに入るのか理解できないだろう。

混んでいたなら、並ぶのが嫌だからだと思われかねない。そう思われるのは辛い、自分がオムツをはかなければならないことを説明するのも嫌だ。

前に「男性トイレにも、女性トイレにも入れない人は、多目的トイレを利用したらいい」と書いたが、実際に使う立場になったら、「なぜ多目的トイレを使うのか？」と非難されそうで遠慮してしまう。

実際に何か言ってくる人は少ないだろう。だが、何か思われているのではないかと意識しすぎてしまう。

結局、「多くの人と違う」ということが強調される結果になる。

わたしは、症状としては軽いから、一人で旅ができる。

「だから、お小遣いをためて旅に出てもいい」となったら、「介助が必要な人はどうするのか？」という問題が出てくる。

「国土を保護するために、田舎で暮らしている人」も、休みをとって、自由区で遊ぶことはできる。

しかし、「管理区に住んで、自由区が近いから、自由区を好きに歩ける」となったら、「それはずるい！」とならないだろうか？

もし、管理区のグループホームに住んで、自由区の図書館を利用し、好きなだけ本が読めるとしたら？

もし、今しているみたいに、ネットで無料のお話を公開する趣味を持ったなら？

そういう自由を許すだろうか？

確かに、もっと悪くなって、「ほとんどベッドから起きられない」から「介護が必要」となったら、「世話すべき弱者」となるだろう。

だが、ある程度自由に動けるなら、「国土を保護するという役割からも、自活して稼ぐという責任からも免除された気楽な人」であり、それを「ずるい」と思わないだろうか？

わたしは、ずるいと思われているかもしれない、と思っている。

なんか、遊んでいて申し訳ない、と思う。

なにか役立てることがあれば、と思うが、やりたくないことを求められてもいいかといわれ

たら、それも嫌だと思う。

「やりたいことで必要とされたい」は、丈夫でも、虚弱体質でも変わらないなら、グループホームにも、なんらかの役割を課した方がいいのかもしれない。

「これは必要なことで、それができることはいいこと」という他人からの評価と、「それをしてほしい」と思うならという自発性と、「してほしい」という要望が揃って、初めて意義を感じられるのではないだろうか。

昔の外国の話には、近所の独り身のお年寄りの話し相手になりに行く、というボランティアが出てくる。

だから、肉体労働は無理だから、精神的な労働として、「お見舞いをする」とかも、いいかもしれない。

面白かった本の話をしたり、互いのことを話し合ったり、「関係を持つ」をする。馬が合わないと難しいが、「役立っている」と感じられることなのかもしれない。

そうなると、コミュニケーション能力に問題がある場合は、どうするのか？という話になってくる。

暴力とか、依存症とか、そういう問題を抱えた人を支援の対象にするのか？

たとえば、グループホームで暴力癖がある人と一緒になったら？

それは嫌だと思う。

そんな人と一緒の家で暮らしたら、気が休まらなくて、精神病が悪化しそうだ。

体が弱い人とか、心が弱い人とか、問題がある人を一ヶ所に集めて、一斉に面倒みることは無理だ。

だから、少人数のグループホームに分ける。

だが、看護が必要な人は、設備が整った大きな病院で面倒を見なければ難しい。

何で困っているかで、求められることは違っている。

どちらにしる、支援施設を田舎に作り、維持していくことは難しいから、都会の隣に作ることになる。

実際には、老人ホームは土地の安い田舎に作られることが多いが、隔離状態になっちゃうよね。

田舎から都会に出ることは難しいし、施設の外は何も整備されてないから。

自分の家があって、ある程度自分のペースで好きなことをして気ままに暮らすことができれば、生きることはそんなに苦痛ではない。

だが、入院生活のように、大部屋で寝起きして、一斉に食事し、一斉に買い物して、提供された娯楽を楽しむ以外にすることがない暮らしは、苦しいものだ。実際、統合失調症で入院したからそう思う。

だから、保護区には個別住宅は必須だろう。

グループホームでも、個室は必要だろう。

一旦獲得した自由を失うことは辛いことだ。

しかし、無限に自由を認める方向で進むことは限界がある。

どこかで線引きしなければならないなら、「この程度なら許せる」という状態を明確にすることではないだろうか。

もしもこのまま自由競争を認め続ければ、「食べ物があるにも関わらず買えない」という問題から抜け出せない。

「お金を配れば解決する」は確かにそうだ。

だが、「元となるお金」はどう生み出すのか？

結局、「革新的なアイデアで、爆発的なヒットを生み続けること」が前提であるなら、「ぼーっとする」という選択肢を許さない矛盾をどう考えるのか？

「必要なことを手間をかけずに済ませたら、あとはぼーっとゆっくりすごしたい」ができる社会を目指すべきではないか。

「好きな人を好きだと思って、見詰め合って暮らすこと」が目指すべきことではないか。

そういう安定した暮らしを内部に確保して、激しい競争を外部に配置して、生きたいように生きられる社会になったら素敵だと思う。

レンジャーとして生きることも、その土地に住みつき守る人として生きることも、「生産力の高さで余った労働力ですべき素敵なこと」だと思う。

自由区で自分の才能を試して、のし上がる生き方も素敵だ。

どちらも意味のあることであり、どちらも必要なことだ。

だが、レンジャーや土地に住みつき子どもやお年寄りを見守ることはお金にならない。

アイデアで爆発的に儲けたお金で支えるべきなのは、レンジャーや見守りをする人たちではないだろうか。

また、レンジャーや見守りをするだけの力がない「弱者」の烙印を押された人は、管理区で保護して暮らすことも、「爆発的ヒットで得られたお金を再配分する先」と言えるのではないだろうか。

爆発的ヒットを生み出すには、行動の自由と、購買者の確保が必要。

再配分したお金がまためぐってくるならば、意味のある再配分ではないだろうか。

「原価に手数料をプラスして販売する」が経済活動の基本だとしよう。

「価値を創造し、原価に比べて莫大な富を生み出す」が起きたとしよう。

前者は、「野菜を作って売る」などが該当する。

後者は、「音楽を作って売る」などが該当する。

野菜は物理的な商品だから、食べたら終わりだし、食べる量も決まっている。

音楽は精神的な商品だから、聞きたいと思う限り何度でも求められる。一度CDで売っても、ライブで聞きたい！と思えば、またお金を生み出すことができる。カラオケや主題歌として使用された場合も、更に価値を生む。

いくら音楽で莫大な資金を集めても、「野菜を作り、人々の食卓に届ける」をする人がいなければ、その人自身も食べられない。

繰り返し求められて、爆発的な価値を生んだとしても、それとインフラの整備とは別のことだ。

だが、「お金」という共通の単位を使っているため、両者は交換可能だ。

交換可能であるがゆえに、「何が、どれだけあるのか？」は見えづらい。

音楽産業も不況だというのが、儲かっている人は儲かっている。

映画とか、ゲームとか、絵画とか、一攫千金で集めたお金は、その人が価値を生み出した対価だから、働きにふさわしい収入を得ていると言えるだろう。

だが、「衣食住を整え、人々が生きていけるようにすること」よりも価値があるのだろうか？

「アイデア勝負で買った人が、好き勝手に暮らせばよい」という問題なのだろうか？

もし、必要以上の資金を再配分する責任があるならば、「支援するにふさわしいとみんなが認めること」をはっきりさせるべきではないか。

「弱いから救う」という福祉はすでに存在している。

しかし、「お金にはならないが必要なことだから、生活できるように支える」という「働ける

が仕事がない人の生活を守る支援」は、存在していない。

もし、わたしの考えが足りなくて、お金を配るだけで解決するなら、自由を制限する必要はない。

だがもし、自由を認める限り、「必要なこと」が決まらず、「最小の手間で最大の効果を発揮する」ができず、「必要なことは低価格競争から抜け出せず」「非日常を売りにすることは才能がなければできない」ために、「何をしたいのか分からない」という問題が解決しないなら、自由は幅を持たせて制限されてもよいのではないだろうか。